

## 男女看護学生におけるジェンダーの特徴

石原 留美<sup>1)</sup>, 松村 恵子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 高松市医師会看護専門学校専門課程看護科

<sup>2)</sup> 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

### Gender related features of male and female nursing students

Rumi Ishihara<sup>1)</sup>\*, Keiko Matsumura<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> *Department of Nursing School of Takamatsu Medical Association*

<sup>2)</sup> *Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

#### 要旨

看護学生の個人のジェンダーに対する意識は、社会または個人の男女に対する思い込みなどから、未だ十分にその見解が統一されている状況にはない。そこで今回は、男女看護学生におけるジェンダーに焦点をあて、その特徴を明らかにし、学生が「心理的両性具有性」のジェンダー・アイデンティティを確立していける教育方法について検討することを目的とした。その得られた特徴から示唆された教育方法は、第一に、自己の男女に対する思い込みを自覚し、ジェンダーそのものに対する個人の意識を明確にする教育的機会を持つ必要がある。第二に、青年後期から成人前期にある男女看護学生は、ジェンダー・アイデンティティの働きが増す前の段階にあり、学生の「心理的両性具有性」のジェンダー・アイデンティティ確立に向け、徐々に促進できる体験の供給が望まれる。

**Key Words:** 男女看護学生 (male and female nursing students), ジェンダー (gender), 心理的両性具有性 (psychologically androgynous), ジェンダー・アイデンティティ (gender identity)

\*連絡先: 〒760-0018 香川県高松市天神前4-14 高松市医師会看護専門学校専門課程看護科 石原 留美

\*Correspondence to: Rumi Ishihara, Department of Nursing School of Takamatsu Medical Association, 4-14 Tenjinmae, Takamatsu, Kagawa 760-0018 Japan

## 緒言

1999年6月、男女共同参画社会基本法が公布・施行された。6年後の2005年には、第2次基本計画が出され、「男女共同参画の理念や『社会的性別』（ジェンダー）の視点の定義について、誤解の解消に努め、また、恣意的運用・解釈が行われないよう、わかりやすい広報・啓発活動を進める。」<sup>1)</sup>と基本的方向性が提示された。それに伴い、各地方公共団体では国民のジェンダーに対する意識の改革に向けた、様々な事業が展開されている。

しかし、ジェンダーそのものに対する個人の意識は、未だ十分にその見解が統一されている状況にはない。看護学生における意識も同様で、日常生活の中で知らず知らずのうちに、社会または個人の男女に対する思い込みなどから人に被害を与え、また自分自身が被害を被っていることに気づいていない。そのため、看護学生のジェンダーに対する意識を明確にし、学生自身が社会または個人の男女に対する思い込みにより被害を与え、被害を被っていることに気づける教育的機会を持つ必要があると考える。

Bem (1974) は、一般に社会で男性に期待された性格である男性性（作動性）と同じく女性に期待された性格である女性性（共同性）の両方が高い自己概念を持つ人を「心理的両性具有性」と定義づけており、心理的健康や社会的適応にとってもっとも理想的である<sup>2)</sup>と考えている。私たち看護師は、対象の人生における重要な場面または人生そのものと向き合いながら、自分自身の人生も生きぬいていかなくてはならない。そのためには、看護基礎教育の場で、対象となる人たちの生命と向き合い、自らの人生も力強く歩んでいくため、個人の男女に対する思い込みなどから、揺れ動く自己を評価し、他者にも歪んだ評価をすることのない自己を築けるように学生を育てていく必要がある。

そこで今回は、男女看護学生が「心理的両性具有性」を有するジェンダー・アイデンティティを確立していける教育方法について検討するため、学生の「心理的両性具有性」がどのように存在しているのか、その特徴を明らかにすることを目的とした。

## 用語の定義

1. ジェンダー：行動様式や性格などに関して、「男性的」あるいは「女性的」などと、社会的に定められた性。（土肥伊都子）<sup>3)</sup>
2. ジェンダー・アイデンティティ：自己の性（sex）を容認した上で成り立つ自我アイデンティティ。（土肥伊都子）<sup>4)</sup>
3. ジェンダー・スキーマ：個人があらゆる情報を「これは女性的」、「これは男性的」という具合に性別化（sex typing）するように認知過程を方向づける。（土肥伊都子）<sup>5)</sup>
4. 心理的両性具有性：ジェンダー・パーソナリティについて、個人は未分化な状態から出発し、幼児期以降、社会に存在するジェンダーに沿ったスキーマを持ち、それが自己のパーソナリティ形成に働けば、女性の多くは女性性優位に、男性の多くは男性性優位になる時期を迎える。そして、青年期以降、より成熟したパーソナリティを獲得するために二面性を統合しようとする働きがみられ、男女とも女性性、男性性をともに自己概念として多く備えた心理的両性具有性の人間になる。（土肥伊都子）<sup>6)</sup>

そこで本研究においては土肥の定義に従い、ジェンダーとは社会的・文化的につくられた性、ジェンダー・アイデンティティは自分の性を肯定的に受け入れ安定した自己評価と歪みのない他者評価ができる状態、ジェンダー・スキーマは個人の男女に対する思い込み、心理的両性具有性は自分の性を肯定的に受け入れ安定した自己評価と歪みのない他者評価するためには、男性性（作動性）・女性性（共同性）の両方が必要であるということ認識し、自己に取り入れている状態と考える。

## 研究方法

1. 期間  
2006年4月24日から4月28日
2. 対象  
筆者が教育に携わっているA看護専門学校（2年課程定時制）の看護学生129名（男性55名、女性74名）
3. データ収集方法  
本研究の目的を検討した上で、最も適してい

ると考え、信頼性・妥当性が確認されている土肥、廣川(2004)の共同性・作動性尺度(CAS)<sup>7)</sup>を用いた。肯定的共同性・作動性尺度の12項目と否定的共同性・作動性尺度の12項目、合計24項目から構成されており、評定は〈かなり当てはまる〉4点、〈やや当てはまる〉3点、〈あまり当てはまらない〉2点、〈全く当てはまらない〉1点の4段階による質問票とした。

#### 4. 分析方法

統計解析SPSS13.0を用いた主要変数の記述統計、因子分析(主成分分析, バリマックス回転)、信頼性分析、一元配置分散分析を行った。

### 倫理的配慮

学生に本研究の目的と方法、研究の目的以外には用いない、成績に影響しない、個人名が特定されないことを文書で説明し、同意を得た。回収は箱への投函を依頼した。測定用具については先行研究者に文書で説明し、使用の承諾を得た。

### 結果

#### 1. 回収率

129部を配付した結果、有効回答数は100部、内訳は男子学生40名、女子学生60名で回収率は77.5%であった。

#### 2. 対象者の属性

表1に示したように、平均年齢は28歳であった。91%の学生に異性か同性、または異性と同性の兄弟姉妹が存在し、32%の学生が現在所属している看護学校以外に専門学校か短期大学または大学を卒業している。また、19%の学生が結婚しており(男子学生15名、女子学生4名)、20%の学生が異性か同性または異性と同性の子どもを持つ。そして自分自身の性に対する受け止め方については、62%が肯定的(男子学生31名、女子学生31名)、5%が否定的(男子学生2名、女子学生3名)、33%がどちらでもない(男子学生7名、女子学生26名)であった。

#### 3. 主要変数の記述統計

共同性・作動性尺度(CAS)24項目の評定段階は表2に示したように、〈かなり当てはまる〉から〈やや当てはまる〉は、「1. ありがたいの言葉を口に出せる」、「7. 素直に謝ることができ

表1. 対象の属性

n=100

| 項目                 |       | (人)         | (%) |
|--------------------|-------|-------------|-----|
| 性別                 | 男     | 40          | 40  |
|                    | 女     | 60          | 60  |
| 年齢                 | 男     | 30歳 (SD5.3) |     |
|                    | 女     | 26歳 (SD5.3) |     |
|                    | 全体    | 28歳 (SD5.7) |     |
| 兄弟姉妹               | なし    | 9           | 9   |
|                    | 異性のみ  | 42          | 42  |
|                    | 同性のみ  | 29          | 29  |
| 現在所属する学校<br>以外の卒業校 | 異性と同性 | 20          | 20  |
|                    | 高等学校  | 100         | 100 |
|                    | 専門学校  | 18          | 18  |
| 結婚                 | 短期大学  | 4           | 4   |
|                    | 大学    | 10          | 10  |
|                    | 大学院   | 0           | 0   |
|                    | 未婚    | 78          | 78  |
| 子ども                | 既婚    | 19          | 19  |
|                    | その他   | 3           | 3   |
|                    | なし    | 80          | 80  |
|                    | 異性のみ  | 5           | 5   |
| 自身の性に対する<br>受け止め方  | 同性のみ  | 5           | 5   |
|                    | 異性と同性 | 10          | 10  |
|                    | 肯定的   | 62          | 62  |
| どちらでもない            | 否定的   | 5           | 5   |
|                    |       | 33          | 33  |

る」、「12. 人の言葉に傷つきやすい」、「14. 人と協力できる」、「19. 思いやりをもって人と接している」の5項目であった。〈あまり当てはまらない〉から〈全く当てはまらない〉の評定段階は、「3. 他人を自分の言いなりにさせる」、「6. 相手の言い分に耳をかさない」、「17. 自分に自信がある」、「18. 自分とは異なる意見を受け入れることはできない」、「23. 人の失敗は許せない」の5項目であった。

#### 4. ジェンダー・タイプの類型化と否定的共同性・作動性の測定

ジェンダー・タイプの類型化は、表3に示したように、男女別に肯定的作動性と肯定的共同性尺度の得点から中央値を求め、分割点を決定し、4つのジェンダー・タイプに分類した。

男性の場合、作動性得点が15点以上・共同性得点が19点以上の場合は15名で心理的両性具有型、作動性得点が15点以上・共同性得点が18点以下の場合は11名で男性性優位型、作動性得点14点以下・共同性得点が19点以上の場合は6名で女性性

表2. 共同性と作動性の因子構造

(n=100)

| 項目                 | 因子構造              |        |        |        | 共通性   | 平均値   | 標準偏差  |
|--------------------|-------------------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
|                    | I                 | II     | III    | IV     |       |       |       |
| 《 否定的共同性 (他者評価) 》  | $\alpha$ 係数=0.732 |        |        |        |       |       |       |
| 12. 人の言葉に傷つきやすい    | 0.724             | 0.099  | -0.001 | 0.131  | 0.551 | 3.110 | 0.851 |
| 4. 他人のことを気にしすぎる    | 0.678             | 0.146  | -0.296 | 0.085  | 0.576 | 2.860 | 0.853 |
| 24. 人の発言を深読みしすぎる   | 0.666             | 0.141  | -0.018 | -0.018 | 0.464 | 2.740 | 0.824 |
| 9. 人前で意見を言うのは苦手    | 0.651             | -0.192 | -0.089 | -0.168 | 0.497 | 2.920 | 0.906 |
| 15. 周りを考えすぎて行動できない | 0.602             | -0.051 | -0.332 | 0.032  | 0.477 | 2.290 | 0.714 |
| 11. すぐに人に頼ることを考える  | 0.343             | 0.009  | -0.333 | -0.168 | 0.147 | 2.570 | 0.655 |
| 《 否定的作動性 (自己中心) 》  | $\alpha$ 係数=0.656 |        |        |        |       |       |       |
| 18. 異なる意見を受け入れられない | 0.203             | 0.745  | -0.150 | 0.006  | 0.619 | 1.920 | 0.630 |
| 23. 人の失敗を許せない      | 0.147             | 0.682  | -0.032 | 0.013  | 0.488 | 1.770 | 0.649 |
| 3. 他人を自分の言いなりにさせる  | -0.129            | 0.555  | 0.220  | -0.177 | 0.405 | 1.700 | 0.674 |
| 6. 相手の言い分に耳をかさない   | -0.030            | 0.541  | -0.090 | -0.334 | 0.413 | 1.940 | 0.663 |
| 17. 自分に自信がある       | -0.366            | 0.502  | 0.280  | 0.220  | 0.513 | 1.930 | 0.768 |
| 2. 無能な人は我慢できない     | 0.005             | 0.484  | 0.073  | -0.156 | 0.265 | 2.340 | 0.741 |
| 19. 思いやりをもって接している  | -0.053            | -0.242 | 0.080  | 0.146  | 0.089 | 3.160 | 0.545 |
| 《 肯定的作動性 (実行力) 》   | $\alpha$ 係数=0.693 |        |        |        |       |       |       |
| 22. 意志が強く、信念を持っている | -0.010            | 0.079  | 0.798  | 0.209  | 0.688 | 2.750 | 0.770 |
| 21. 決心すればすぐに行動に移す  | -0.143            | -0.083 | 0.773  | -0.093 | 0.633 | 2.860 | 0.738 |
| 20. 困難なことにもくじけない   | -0.173            | -0.117 | 0.539  | 0.090  | 0.342 | 2.720 | 0.805 |
| 16. 自分の意見は主張する     | -0.246            | 0.233  | 0.531  | 0.179  | 0.429 | 2.610 | 0.680 |
| 《 肯定的共同性 (協調性) 》   | $\alpha$ 係数=0.628 |        |        |        |       |       |       |
| 14. 人と協力できる        | 0.055             | -0.101 | 0.120  | 0.654  | 0.455 | 3.120 | 0.624 |
| 1. ありがとうを口に出せる     | -0.268            | -0.150 | -0.136 | 0.621  | 0.499 | 3.640 | 0.541 |
| 8. 積極的に行動する        | -0.055            | 0.007  | 0.406  | 0.578  | 0.502 | 2.670 | 0.766 |
| 7. 素直に謝ることができる     | -0.468            | -0.189 | -0.026 | 0.497  | 0.502 | 3.180 | 0.641 |
| 13. 人に攻撃的な態度をとる    | 0.028             | 0.381  | 0.288  | -0.491 | 0.470 | 2.190 | 0.800 |
| 10. 人をほめるのがうまい     | 0.116             | -0.070 | 0.272  | 0.418  | 0.267 | 2.430 | 0.670 |
| 5. 相手の立場に立って考えられる  | -0.062            | -0.269 | 0.176  | 0.333  | 0.218 | 2.900 | 0.577 |
| 固有値                | 4.11              | 3.00   | 1.95   | 1.45   |       |       |       |
| 寄与率                | 17.10             | 12.51  | 8.14   | 6.02   |       |       |       |
| 累積寄与率              | 17.10             | 29.62  | 37.76  | 43.78  |       |       |       |

表3. ジェンダー・タイプの類型 (n=100)

| タイプ      |        | 対象   | 度数 |    |
|----------|--------|------|----|----|
| 心理的両性具有型 |        | 男子学生 | 15 | 39 |
|          |        | 女子学生 | 24 |    |
| 性別化型     | 男性性優位型 | 男子学生 | 11 | 20 |
|          |        | 女子学生 | 9  |    |
|          | 女性性優位型 | 男子学生 | 6  | 21 |
|          |        | 女子学生 | 15 |    |
| 未分化型     |        | 男子学生 | 8  | 20 |
|          |        | 女子学生 | 12 |    |

優位型、作動性得点が14点以下・共同性得点が18点以下の場合は8名で未分化型に分類した。

女性の場合、作動性得点が16点以上・共同性得点が18点以上の場合は24名で心理的両性具有型、作動性得点が16点以上・共同性得点が17点以下の場合は9名で男性性優位型、作動性得点が15点以下・共同性得点が18点以上の場合は15名で女性性優位型、作動性得点が15点以下・共同性得点が17点以下の場合は12名で、未分化型に分類した。

男女合わせると性別化型の「男性優位型」は20名、「女性優位型」は21名で41名と最も多く、次

に、「心理的両性具有型」が39名、「未分化型」が20名となった。

否定的共同性・作動性の測定については否定的共同性・作動性尺度の各6項目を合計し、得点とした。

その結果は図1に示したように、未分化型の否定的共同性は18.1点、否定的作動性は12.0点であった。女性優位型の否定的共同性は17.2点、否定的作動性は11.3点であった。

男性優位型の否定的共同性は15.7点、否定的作動性は13.2点であった。心理的両性具有型の否定的共同性は15.7点、否定的作動性は11.4点であった。

#### 5. 因子分析と一元配置分散分析後の多重比較

肯定的共同性・作動性尺度の12項目と否定的共同性・作動性尺度の12項目、合計24項目を変数とした因子分析の結果、表2に示したように、固有値1.00以上、累積寄与率43.78%、因子負荷量0.333以上を解釈し、4因子を抽出した。

因子Ⅰは「12. 人の言葉に傷つきやすい」, 「4. 他人のことを気にしすぎる」など6項目で「否定的共同性 (他者評価)」と命名した。α係数は0.732であった。

因子Ⅱは「18. 異なる意見を受け入れられない」, 「23. 人の失敗を許せない」など7項目で「否定的作動性 (自己中心)」と命名した。α係数は0.656であった。

そして同じく24項目について心理的両性具有型, 男性優位型, 女性優位型, 未分化型の一元配置分散分析後の多重比較を5%の有意水準で行った結果, 有意差が見られなかったのは24項目中, 否定的共同性の「11. すぐに人に頼ることを考えてし

まう」, 「12. 人の言葉に傷つきやすい」, 「24. 人の発言を深読みしすぎる」の3項目と, 否定的作動性の「2. 無能な人は我慢できない」, 「3. 他人を自分の言いなりにさせる」, 「6. 相手の言い分に耳をかさない」, 「23. 人の失敗は許せない」の4項目で合わせて7項目であった。否定的共同性の3項目については全て因子Ⅰ「否定的共同性 (他者評価)」に, 否定的作動性の4項目は全て因子Ⅱ「否定的作動性 (自己中心)」に含まれていた。

因子Ⅲは「22. 意志が強く, 信念を持っている」, 「21. 決心すればすぐに行動に移す」など4項目で「肯定的作動性 (実行力)」と命名した。α係数は0.693であった。

この4項目について, 一元配置分散分析後の多重比較を5%の有意水準で行った結果, 全て有意差がみられており, その結果を図2に示した。4項目とも, 『両性具有型』と『男性優位型』『未分化型』で有意差がみられ, 肯定的共同性が影響するということが明らかになった。

因子Ⅳは「14. 人と協力できる」, 「1. ありがとうを口に出せる」など7項目で「肯定的共同性 (協調性)」と命名した。α係数は0.628であった。

この7項目については, 一元配置分散分析後の多重比較を5%の有意水準で行った結果, 全て有意差がみられており, その結果を図3に示した。7項目とも, 『両性具有型』と『男性優位型』に有意差がみられ, 「13. 人に攻撃的な態度をとる」以外の6項目では, 『両性具有型』と『未分化型』にも有意差がみられた。このことから, 肯定的共同性が影響するということが明らかになった。

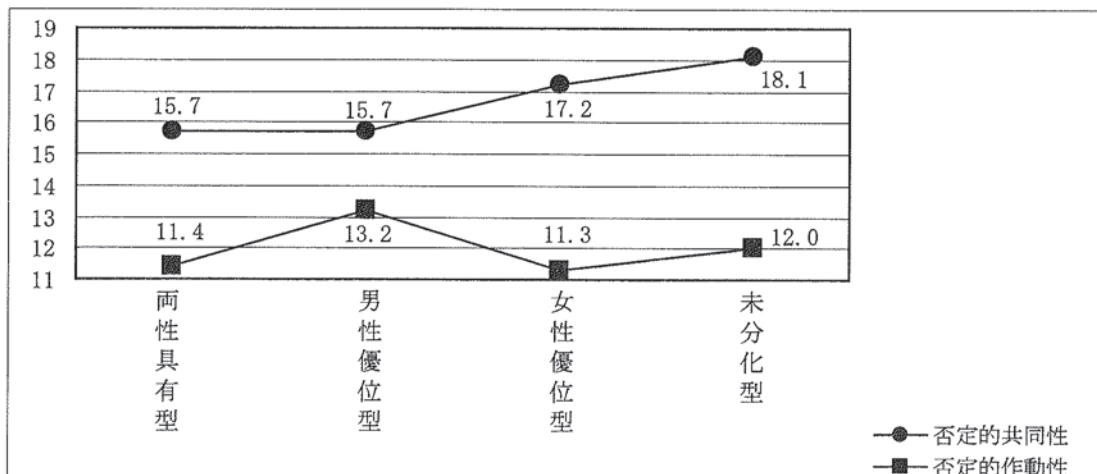
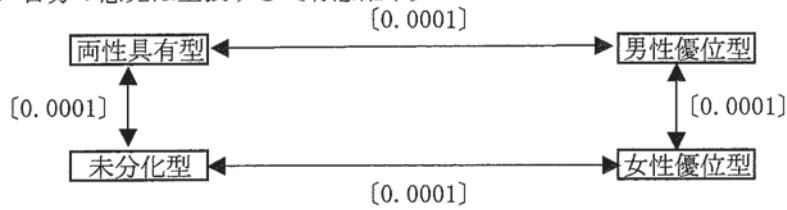
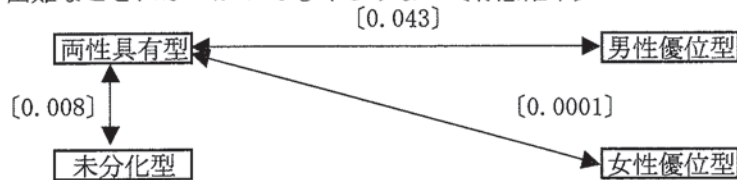


図1. ジェンダー・タイプ別の否定的共同性・作動性の平均得点

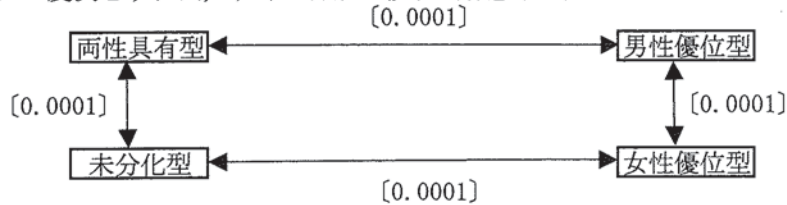
16. 自分の意見は主張する [有意確率]



20. 困難なことにぶつかってもくじけない [有意確率]



21. 一度決心すれば、すぐに行動に移す [有意確率]



22. 意志が強く、信念を持っている [有意確率]

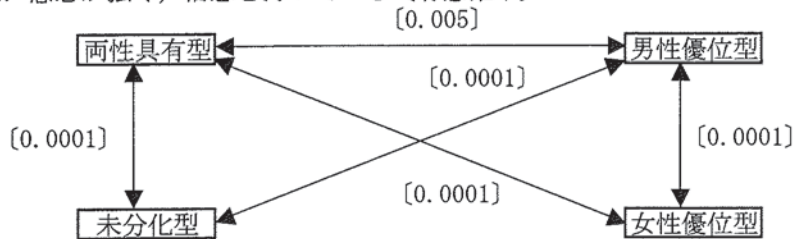


図2. 因子Ⅲに関する一元配置分散分析後の多重比較

考 察

男女看護学生におけるジェンダーの特徴について、明らかになったことから考えられることは、第一に、男女看護学生は、自分の性別を意識し、ジェンダー・ステレオタイプに沿った行動をとる性別化型の学生が多いことが明らかになった。

その要因として考えられることは、今回、研究に同意を得られた学生の属性の特徴である、男女の数がほぼ半数の共学である教育環境、異性との関係性が深まり親密性が高まる年代であるということ、配偶者や子どもと暮らしている学生が多いこと、また、対象となった看護学校は夜間定時制であり、学生は全員、仕事をしており、社会に出ていることなどから、自分の性差を意識する機会が多いということが影響していると考えられる。

石原ら<sup>8)</sup>の男女看護学生を対象とした、性役割に対する自己像と異性像の関係からも、自分自身に伝統的な性役割観を持ち、異性に対しても伝統的な性役割期待を持っていることが明らかになっている。

そのため、異性と接する際には、自分の性別を意識し、自己のジェンダー・スキーマによる「思い込み思考」が働き、ジェンダー・ステレオタイプに沿った行動を「演じ」、異性にも「期待」している<sup>9)</sup>ということが考えられる。このことは、職業上、性や生殖に関する問題と向き合うとき、自己のジェンダー・スキーマから相手の反応を予測してしまうため、あらかじめ予測したこととは全く異なった反応が返ってきた場合、それを受容できない可能性がある。このように、知らず知らずのうちに、学生自身が、個人の男女に対する思

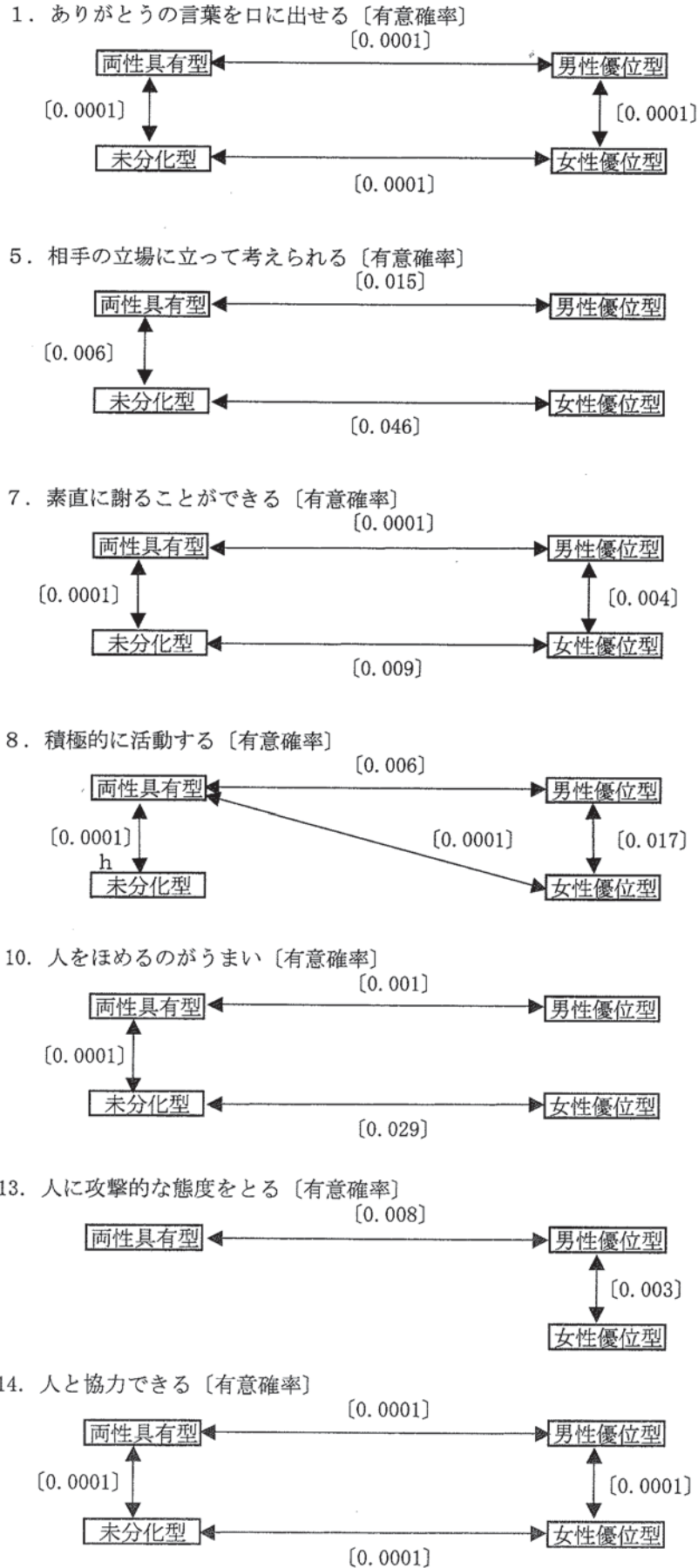


図3. 因子IVに関する一元配置分散分析後の多重比較

い込みにより、ジェンダーによる被害を与える可能性は高いと考える。また、日常生活のあらゆる場面で、自分の性差を意識し、相手の望むジェンダーを演じなければいけないため、ジェンダーによる被害を被る可能性も高い。

以上のことから、学生は自己のジェンダー・スキーマによる「思い込み思考」を持っていること、そしてジェンダー・ステレオタイプに沿った行動を「演じ」ていること、また異性にもそれを「期待」していることを自覚する必要がある。そのためには、ジェンダーというものが、社会的に定められたものであるということ意識できる学生を育てていくための、教育的機会を持つ必要があることが推測された。

第二に、青年後期から成人前期にある看護学生の多くは、ジェンダー・アイデンティティの働きが増す前の段階にある。そして、肯定的共同性が低く、否定的作動性が高くなることで、他者評価と相対的に独立した自己評価に揺れ動きがみられるということが明らかになった。

これは、現代社会で他者との相互作用のなかで生きていくうえで、傷つきやすく、脆弱な自分を守るというナルシズムを成立させるために、第三者の評価という鏡を必要としているということが考えられる。現代社会は、ジェンダーそのものに対する認識が不十分であるため、社会で好意的に認めてもらうためには、ジェンダー・ステレオタイプに沿った「男らしい」「女らしい」行動をとったほうが無難なことが多い。そこで、周囲から良い評価を得るために、ジェンダー・ステレオタイプに沿った行動をとっているのではないかと考える。

しかし、他者による評価で自分自身を値踏みするという方法は、常に根底に不安がつきまとい、安定した自己の価値を保つことが難しい。そのため、他者の評価に強く影響されない、自分は自分であるという安定した自己評価を保ち続ける必要がある。それがBem (1974) のいう、一般に社会で男性に期待された性格である男性性（作動性）と同じく女性に期待された性格である女性性（共同性）の両方が高い自己概念を持つ「心理的両性具有性」である。この「心理的両性具有性」では、土肥<sup>6)</sup>によると、肯定的作動性は否定的共同性を緩和し、また肯定的共同性は否定的作動性を緩和することが示されており、これらは安定した自己評価の基盤になると考える。

以上のことから、学生の自我同一性が確立されていく時期である看護基礎教育の場は、学生のジェンダー・アイデンティティが確立に向かう時期の重要な環境として存在している。そのため、その関わり方については、本研究からジェンダーに対する学生の内的態勢には個人差があることが、明らかになっており、その学生の内的態勢によって教員の関わり方を変化させていかなければならない。講義・演習または実習において、同じように体験することも、個人により全く違った体験と経験される可能性がある。そのことを教員は認識したうえで、学生の「心理的両性具有性」を有するジェンダー・アイデンティティ確立に向け、徐々に促進できる体験の供給が望まれる。そして、学生が実際にどのように体験し、変容し、次にどう紡いでいるのか、見守りつつ、方向性を吟味・検討していく必要があることが示唆された。

## 結 論

1. 男女看護学生は、自分の性別を意識し、ジェンダー・ステレオタイプに沿った行動をとる性別化型の学生が多いため、自己のジェンダー・スキーマを自覚し、ジェンダーそのものに対する個人の意識を明確にする教育的機会を持つ必要がある。
2. 青年後期から成人前期にある男女看護学生は、ジェンダー・アイデンティティの働きが増す前の段階にあり、他者評価と相対的に独立した自己評価に揺れ動きがみられる学生が多いため、学生の「心理的両性具有性」を有するジェンダー・アイデンティティ確立に向け、徐々に促進できる体験の供給が望まれる。

## 結 語

今回、男女看護学生が「心理的両性具有性」を有するジェンダー・アイデンティティを確立していける教育方法について検討するため、学生の「心理的両性具有性」がどのように存在しているのか、その特徴を明らかにすることを研究の目的とした。そこで本研究では、筆者が教育に携わっている2年課程定時制の男女看護学生を研究の対象とした。しかし、看護学生全体から考えると2年課程定時制というのは数の少ない存在であるた



め、一般化するには限界があるといえる。

そのため、今後の課題として、看護学生として一般的な対象を中心とした検討をしていきたい。また、対象を患者としての一面から理解するのではなく、過去から未来へ人生を主体的に歩み続ける生活者として理解し、対象の人生そのものと健康を関連させながら援助していくことを学ぶ看護基礎教育の環境としては、男性と女性がともに存在することに教育的効果があると考え、そこで、今後も男女看護学生にこだわりを持ち続け取り組んでいきたい。

また、看護基礎教育の場で、男女看護学生の「心理的両性具有性」を有するジェンダー・アイデンティティ確立に向けた細やかな教育方法についても引き続き検討していきたいと考える。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力頂きました皆様方に、心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局編集 (2006) 平成18年度男女共同参画白書, 独立行政法人国立印刷局, 東京, p108-109.
- 2) 土肥伊都子 (1994) 心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察, 心理学評論 2: 193.
- 3) 土肥伊都子 (1999) “ジェンダーに関する自己概念の研究”, 多賀出版, 東京, p10.
- 4) 前掲3) p32.
- 5) 前掲3) p25.
- 6) 前掲2) p197-198.
- 7) 土肥伊都子, 廣川空美 (2004) 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定, 心理学研究 5: 420-427.
- 8) 石原留美, 松村恵子 (2006) 男女看護学生の性役割に対する自己像と異性像の関係, 第37回日本看護学会論文集—看護教育—p258-260.
- 9) 青野篤子, 森永康子, 土肥伊都子 (2004) “ジェンダーの心理学”, 改訂版, ミネルヴァ書房, 京都, p151.

## Abstract

Awareness of gender of each nursing student is not yet fully raised. In this study, we therefore focus on that of gender of male and female nursing students, and clarify their cases for the purpose of finding out some educational method, by which students will be able to establish their “psychologically androgynous” gender identity. The result firstly suggests that it is necessary to give them educational opportunities, where they become aware of their own gender and secondly that male and female nursing students in the late period of adolescence and in the early period of adulthood are at a stage where their gender identity has not started to increase. It is desirable for them to experience gradual progress towards the establishment of “psychologically androgynous” gender identity.

受付日 2006年10月31日

受理日 2007年1月19日